

2021. 1. 3 (日) マラキ 2 : 1 ~ 17

- 2:1 「祭司たちよ、今、この命令があなたがたに下される。
- 2:2 もし、あなたがたが聞き入れず、もし、わたしの名に栄光を帰することを心に留めないなら——万軍の主は言われる——わたしは、あなたがたの中にこののろいを送り、あなたがたの祝福をのろいに変える。もう、それをのろいに変えている。あなたがたがこれを心に留めないからだ。
- 2:3 見よ。わたしは、あなたがたの子孫を責め、あなたがたの顔に糞をまき散らす。あなたがたの祭りの糞を。あなたがたはそれとともに投げ捨てられる。
- 2:4 このときあなたがたは、わたしがレビとの契約を保つために、あなたがたにこの命令を送ったことを知る。——万軍の主は言われる——
- 2:5 わたしの、彼との契約は、いのちと平安であった。わたしはそれらを彼に与えた。それは恐れであったので、彼はわたしを恐れ、わたしの名の前に、おののいた。
- 2:6 彼の口には真理のみおしえがあり、彼の唇には不正がなかった。平和と公平さのうちに、彼はわたしとともに歩み、多くの者を不義から立ち返らせた。
- 2:7 祭司の唇は知識を守り、人々は彼の口からみおしえを求める。彼が万軍の主の使いだからだ。
- 2:8 しかし、あなたがたは道から外れ、多くの者を教えによってつまづかせ、レビとの契約を損なった。——万軍の主は言われる——
- 2:9 わたしもまた、あなたがたを、すべての民に蔑まれ、軽んじられる者とする。あなたがたがわたしの道を守らず、えこひいきをしながら教えたからだ。」
- 2:10 私たちすべてには、唯一の父がいるではないか。唯一の神が、私たちが創造されたではないか。なぜ私たちは、互いに裏切り、私たちの先祖の契約を汚すのか。
- 2:11 ユダは裏切り、イスラエルとエルサレムの中で忌まわしいことが行われた。まことにユダは、主が愛された主の聖所を汚し、異国の神の娘をめとった。
- 2:12 このようなことをする者を、どうか主がヤコブの天幕から一人残らず断ち切ってください。たとえその者が万軍の主にささげ物を献げても。
- 2:13 あなたがたはもう一つのことをしている。あなたがたは、涙と悲鳴と嘆きで、主の祭壇をおおっている。主が、もうささげ物を顧みず、あなたがたの手からそれを喜んで受け取られないからだ。
- 2:14 「それはなぜなのか」とあなたがたは言う。それは主が、あなたとあなたの若いときの妻との証人であり、あなたがその妻を裏切ったからだ。彼女はあなたの伴侶であり、あなたの契約の妻であるのに。
- 2:15 神は人を一体に造られたのではないか。そこには、霊の残りがあつた。その一体の人は何を求めるのか。神の子孫ではないか。あなたがたは、自分の霊に注意せよ。あなたの若いときの妻を裏切ってはならない。
- 2:16 「妻を憎んで離婚するなら、——イスラエルの神、主は言われる——暴虐がその者の衣をおおう。——万軍の主は言われる。」あなたがたは自分の霊に注意せよ。裏切ってはならない。
- 2:17 あなたがたは、自分のことばで主を疲れさせた。あなたがたは言う。「どのようにし

て、私たちが疲れさせたのか。」それは、あなたがたが「悪を行う者もみな主の目にかかっている。主は彼らを喜ばれる。いったい、さばきの神はどこにいるのか」と言うことによつてだ。

#### <説教>

神である主は、罪深いイスラエルをご自分の民として選び、ずっと変わらず愛して下さっていました。

しかしイスラエルの民は、自分たちを選んでくださった主に感謝することもなく、むしろ反対に神の愛を疑い、神を侮り軽んじていました。

主を自分たちの神、父、王として愛することをせず、重んじることなく、恐れることもありませんでした。

そして、まず最初に自分たちのために良いものを確保した後で、余り物の古い〈汚れたパン〉や〈盲目の動物〉〈足の萎えたものや病気のもの〉〈かすめたもの〉〈損傷のあるもの〉を平気で神に献げていました。

そんな本来神に献げてはならない物を、祭司までもが民から平気で受け取ってそのまま神殿の祭壇で献げ、神を侮り軽んじ、神の名を汚していました。

それで神は「わたしはあなたがたを喜ばない。…わたしは、あなたがたの手からのささげ物を受け入れない。」と言われる、そう神はマラキを通して警告し、神の民の罪を告発なさいました。

本日読む2章でも、「祭司たちよ、今、この命令があなたがたに下される。」(2:1)と祭司に対する神の告発が続きます。

「もし、あなたがたが聞き入れず、もし、わたしの名に栄光を帰することを心に留めないなら——万軍の主は言われる——わたしは、あなたがたの中にこののろいを送り、あなたがたの祝福をのろいに変える。もう、それをのろいに変えている。あなたがたがこれを心に留めないからだ。」(2:2)

祭司の務めは、神の〈命令〉を〈聞き入れ〉、神の〈命令〉に従い、神の〈名に栄光を帰する〉こと、それをまず自分がして、民にも正しく教えることでした。

そうやって神の民に神の〈祝福〉をもたらすことでした。

しかし今や正反対の、神の〈のろい〉を民にもたらすこととなっていたのです。

それで神は祭司たちに、「見よ。わたしは、あなたがたの子孫を責め、あなたがたの顔に糞をまき散らす。あなたがたの祭り【祭壇にささげられる動物のこと】の糞を。あなたがたはそれとともに投げ捨てられる。」(2:3)とご自分の〈のろい〉を〈宣告〉なさるのでした。

それはまず祭司たち(レビ族の子孫)が悔い改めて、神が彼らにお与えになった本来の務め—神の命令に従ったささげ物を献げ、神の律法を正しく教えて、(自分たちも含めた)神の民に神からの〈いのちと平安〉を、〈祝福〉をもたらすこと—に立ち帰るためでした。

罪深い自分たちをそのような尊い職務に召して下さり〈いのちと平安〉を約束して下さった神を祭司は愛し、神を〈恐れ〉、神の前に〈おののい〉て神に仕え、イスラエルの民のために神にいけにえを献げ、神が民の罪をお赦しになることを宣言し、神にある〈い

のちと平安)を民のうちに回復させるのが祭司の務めでした。

祭司が神の〈真理のみおしえ〉を語り、〈不正〉なことは語らず、〈平和と公平さのうちに〉神と〈ともに歩み〉をしたときには、イスラエルの民の〈多くの者を不義から立ち返らせた〉のでした。(5-6)

祭司は〈万軍の主の使い〉としてその〈唇〉で神について、神の律法の正しい〈知識〉を〈守り〉教え、民は〈彼の口からみおしえを求める〉(7)というのが神のお定めになったことでした。

しかし、今や祭司は神のお定めになった〈道から外れ〉〈道を守らず〉、〈多くの者を不義から立ち返らせ〉るのでなく、反対に〈多くの者を教えによってつまずかせ〉、神にある〈いのちと平安〉を〈損なっ〉ています。(8-9)

祭司は神だけを〈恐れ〉、神の御前でだけ〈おののい〉て、人間を恐れず、人間の顔をうかがわず、即ち〈えこひいきをし〉ないで神の〈真理のみおしえ〉を民に教えなければなりませんでした。

しかし当時の祭司たちはそうしていませんでした。

その結果、民は神について、神の〈真理のみおしえ〉について正しく知ることなく、心と口と行い(ささげ物)で神の愛を疑い、信じないで、神を侮り軽んじていたのでした。

神が〈受け入れない〉、神の〈祝福〉〈いのちと平安〉でなく〈のろい〉をもたらす生き方、神を愛さず、人も愛さない、自己中心、自分勝手な生き方をしていたのでした。

そんな生き方の結果と言うか、生き方そのものと言うか、そんなものがイスラエルの人々の「雑婚」(10-12)、そして「離婚」(13-16)という形で露わになっていました。

ここで言う「雑婚」とはイスラエルの民がイスラエルの民でない〈異国の神〉(11)を礼拝する人と結婚することです。

真の神を知らず信じないで異教の神・偶像を拝み、その風習に染まっている人と結婚すれば、その人が拝んでいる神と風習も一緒に持ち込まれ、偶像礼拝の誘惑・危険にもろにさらされるのです。

それで聖書で何度も厳しく警告され、禁じられていました(出エジプト 34:14-16、申命記 7:3-4、ヨシュア 23:11-13、I列王 11:1-11)。

それにもかかわらず、当時の民も〈異国の神の娘をめぐり〉、〈互いに裏切り〉、〈先祖の契約を汚し〉、〈裏切り〉、〈忌まわしいこと〉を行い、〈主が愛された主の聖所を汚し〉ていました(10-12)。

マラキは「このようなことをする者を、どうか主がヤコブの天幕から一人残らず断ち切ってくださいるように。たとえその者が万軍の主の主にささげ物を献げても。」(12)と主に祈るほかありませんでした。

マラキと非常に近い時代のエズラ記とネヘミヤ記にもこの「雑婚」の問題が記され、さらにはそのことについての悔い改めの様子が記されています(エズラ 9-10章、ネヘミヤ 13:23-30)。

ネヘミヤは〈私たちの神の信頼を裏切るといふ、この大きな悪〉(ネヘミヤ 13:27)と書いています。

マラキは続けて「あなたがたはもう一つのことをしている」と言って民の「離婚」の問題を指摘しました(13-16)。

〈主の祭壇〉に来て〈ささげ物〉をして神からの祝福を祈っても、〈主が顧みず〉〈それを喜んで受け取らない〉、〈「それはなぜなのか」〉と言って民は〈涙と悲鳴と嘆きで主の祭壇をおおって〉いました(13-14)。

その理由を神はマラキを通して教えてくださいました(本当は祭司がとっくに教えていなければならなかったのに)。

結婚は〈主が〉その〈証人〉としてお立ちになる、主の前での聖なる〈契約〉であり、男と女を〈一体に造られ〉る〈神〉のみわざです(14-15)(創世記 2:24、マタイ 19:4-6)。

「ですから、彼らはもはやふたりではなく一体なのです。そういうわけで、神が結び合わせたものを人が引き離してはなりません。」(マタイ 19:6)と主イエスが言われる通りでした。

なのにイスラエルの民は神が〈証人〉として結ばれた〈伴侶〉、〈契約の妻〉を平気で〈裏切って〉離婚し、それを神と妻に対する罪だと思っていなかったのです。

しかし、〈イスラエルの神、主は言われ〉ます(16)。

「妻を憎んで離婚するなら、暴虐がその者の衣をおおう。」と(この新改訳 2017 の訳は、「もしあなたが憎み去らせるなら、不敬虔があなたの思いを覆うであろう」という 70 人訳に拠ったと思われる。新改訳第 3 版は「わたしは離婚を憎む」とイスラエルの神、主は仰せられる。「わたしは、暴力でその着物をおおう」と万軍の主は仰せられる。)でした。

もちろん文脈からして、また主イエスのみことばによっても、神が「離婚を憎む」ほど嫌われるというのはその通りです。

弱い立場の妻を自分勝手に、自分の都合や感情・欲望に任せて不法に強引に離縁するような、そうやって愛のかけらもなく妻に暴力を振るうような無慈悲な裏切り者には神が妻の代わりに復讐者となって〈暴虐〉でその者をまるまる完全に覆ってやると言われます。

結局、雑婚にしろ離婚にしろ、神を正しく知らず、愛さず、恐れないという〈いのちと平安〉のない神との悪しき関係、神に対する侮りと軽視が、この世で一番身近で親密な人間関係である結婚というところに露骨に現れるのです。

そんな祭司も民も共に罪に沈み、「悪を行う者もみな主の目にかなっている。主は彼らを喜ばれる。いったい、さばきの神はどこにいるのか」(17)と神に向かって反抗的に厚かましく言い放つだけでした。

そのように神の契約も人の契約も平気で破り、裏切り、〈いのちと平安〉にはほど遠い、反対に「罪と死と暴虐」がはびこる彼らのところに、つまりこの世に、彼らと同じく罪深い私たちのところにイエス・キリストが〈あわれみ深い、忠実な大祭司〉(へブル 2:17)、〈偉大な大祭司〉(同 4:14)、〈私たちの大祭司〉(同 4:15)として来てくださったのです。

そして父なる神のみこころに従って十字架に架かり、私たちの罪のために、罪無きご自分自身をただ一度(へブル 7:27、9:12、10:10)神にお献げになって、私たちの罪を贖ってくださいました。

そうやって神の愛を知らず、また神の義も知らず、何が神に喜ばれ、何が神に憎まれるかも知らないで神と人に対して罪を犯し死と滅びに向かっていた私たちにキリストが〈いのちと平安〉をもたらしてくださいました。

「わたしはあなたがたを愛している。」(マラキ 1:2)と言われた神の愛はイエス・キリストによって完全に現されたのです(ローマ 5:8、I ヨハネ 4:9,10)。